

RI\*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0025
調査タイトル	「日本女子大学の卒業生実態調査-家政学研究科修了生の場合-」
論文／雑誌名	「日本女子大学の卒業生実態調査-第3報 家政学研究科修了生の場合-」『日本女子学紀要 家政学部』第49号
著者	佐々井啓、沖田富美子、真橋美智子、塚原典子
掲載ページ	pp.23-30.
発行年	2002.03
出版社	日本女子大学

# 日本女子大学

# 紀要

## 家政学部

49

1. 日本女子大学の卒業生実態調査 …… 沖田富美子・佐々井 啓・真橋美智子・塚原 典子 …… 1	
— 第1報 家政学部卒業生の場合 —	
2. 日本女子大学の卒業生実態調査 …… 真橋美智子・沖田富美子・佐々井 啓・塚原 典子 …… 13	
— 第2報 通信教育課程卒業生の場合 —	
3. 日本女子大学の卒業生実態調査 …… 佐々井 啓・沖田富美子・真橋美智子・塚原 典子 …… 23	
— 第3報 家政学研究科修士の場合 —	
4. 幼児期の運動有能感と行動特性-2- …… 岩崎 洋子・猪俣 春世・吉田伊津美 …… 31	
— 運動有能感の高低と小学校生活との関連 —	
5. 幼児の遊び場面にみる意図の共有のプロセス …… 岩田 恵子 …… 37	
6. 倉橋惣三の保育理論研究 …… 小川 博久 …… 43	
— 保育実践と理論との関係性をどうおさえたか —	
7. 幼児の音楽的な表現活動についての一考察 …… 金本 佳世・大畑 祥子 …… 51	
— 昭和23年『保育要領』を中心として —	
8. ひとりっ子に関する研究 (2) …… 高井一川上 清子 …… 59	
— 保育現場において —	
9. 男子青年の自己意識に関する研究-(1)- …… 福本 俊 …… 67	
10. 極めて速く直線的に自動酸化する異様なりノール酸メチル材料の存在 …… 森田 牧朗・山崎 貴子 …… 71	
11. 阪神・淡路大震災の事例を通してみた被災マンション再建事業に関する研究 …… 石川 孝重 …… 77	
12. ユーザーにわかりやすい揺れ性能レベルの説明に関する研究 …… 野田千津子・石川 孝重 …… 83	
13. 集合住宅に居住する中高生の家族生活からみた自室に関する考察 …… 定行まり子・下戸由貴子 …… 89	
14. 大型児童センター及び児童センターにおける中高生の地域施設利用の実態について …… 定行まり子・根橋由里子 …… 97	
15. 市民ひとりひとりの環境負荷低減に向けた行動の促進に関する考察 …… 平田 京子 …… 105	
— 若者の環境配慮行動に関する意識に着目した場合 —	
16. 雑司ヶ谷の街並に関する研究 2 …… 山崎 美佳・後藤 久 …… 113	
— 鬼子母神信仰の盛衰が街並に与えた影響について —	
17. 2000オリンピック女子バレーボール最終予選のラインアップ分析に関する研究 …… 島津 大宜・泉川 喬一・山本 外憲・明石 正和 — ラインアップの定着率, 変動率, 一致率および順位相関 — 坂井 充・田原 武彦・原田 智 …… 119	
18. 作業用手袋着用時の手部の温熱感覚特性 …… 多屋 淑子・藤村 明子 …… 129	
19. すくい縫いミシン縫製における動的縫い糸張力の測定と縫い糸消費長 …… 松梨久仁子・島崎 恒蔵 …… 135	
20. フリースクールの現状と課題 …… 坂田 仰 …… 141	
— 不登校問題の一断面 —	
21. 少年事件や児童虐待への心理教育的介入の理論的背景 …… 巖岩 秀章 …… 147	
— パーソナリティ・スタイルへのかかわり —	
22. 思春期・青年期における同一化と独自化Ⅱ …… 巖岩 秀章・今村 理洋 …… 155	
— 事例を通しての考察 —	
平成十三年度家政学部第52回生卒業論文論題 …… 161	

平成14年3月

# JOURNAL

## HOME ECONOMICS

49

1. F. Okita, K. Sasai, M. Mabashi and N. Tukahara : The Circumstances and Movement of Japan Women's University Graduates — Part 1 The Case of Graduates from the Faculty of Home Economics —	1
2. M. Mabashi, F. Okita, K. Sasai and N. Tukahara : The Actual Circumstances and Movement of Japan Women's University Graduates — Part 2 Case of the Correspondence Course Graduate —	13
3. K. Sasai, F. Okita, M. Mabashi and N. Tukahara : The Actual Circumstances and Movement of Japan Women's University Graduates — Part 3 The Case of Graduate School of Home Economics —	23
4. H. Iwasaki, H. Inomata and I. Yoshida : A Study of Exercise Competence and Behavioral Characteristics in Childhood-2- — The Relationship between Exercise Competence Level and Elementary School Life —	31
5. K. Iwata : The Process of Sharing Intent in Preschoolers' Free Play	37
6. H. Ogawa : Special Features of the Early-Childhood-Education Theory of Kurahashi	43
7. K. Kanamoto and S. Ohata : A Study of 'Expression' Activities in Music Education for Children — on Hoiku-Yōryō in 1948 (Showa 23) —	51
8. K. Takai-Kawakami : The Only Child (2) — In the nursery school —	59
9. S. Fukumoto : A Study of Self-Concept in Male Adolescence -1-	67
10. M. Morita and T. Yamazaki : Existence of Crazy Methyl Linoleate Materials Undergoing Very Rapid and Linear Autoxidation	71
11. T. Ishikawa : A Study on the Rebuilding and Repairing of Apartments Damaged in the Great Hanshin-Awaji Earthquake	77
12. C. Noda and T. Ishikawa : Intelligible Expression of Vibration Performance for Users	83
13. M. Sadayuki and Y. Shimoto : A Study of the Effect of Adolescents' Rooms on their Family Life	89
14. M. Sadayuki and Y. Nehashi : Utilization of Public Facility by Adolescents in case of Large Scale Children's Center and Ordinary ones	97
15. K. Hirata : A Device for Promoting Consciousness of Ecological Issues Among Young People	105
16. M. Yamasaki and H. Gotoh : A Study of the Appearance of Zoushigaya 2 — The influence of the rise and fall of the Kishimojin Temple upon the appearance —	113
17. D. Shimazu, K. Izumikawa, S. Yamamoto, M. Akashi, M. Sakai, T. Tahara and S. Harada : A Study of Line-up Analysis in International Women's Volleyball 2000 Olympic Final Qualification Matches — Rank-stability, Rank-change and Rank-agreement : Rates as well as Rank Correlation of Line-ups —	119
18. Y. Taya and A. Fujimura : Characteristic of Thermal Sensation of Hands during Wearing Gloves	129
19. K. Matsunashi and K. Shimazaki : Measurement of Dynamic Thread Tension during Blind Stitch Machine Sewing and Its Sewing Thread Consumption	135
20. T. Sakata : Some Analysis of Home Education So-called "Free School" — An Aspect of Truancy/School-Phobia —	141
21. H. Horoiwa : Theoretical Background of Psychoeducational Intervention to Adolescent Crime and Child Abuse — Relation to the Pasonality Style —	147
22. H. Horoiwa and R. Imamura : Identification and Personalization in Adolescence — A case-study analysis —	155
<hr/>	
Title of Bachelor's Theses Presented to the Faculty of Home Economics, 2001	161

JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY

2002

## 日本女子大学の卒業生実態調査

— 第3報 家政学研究科修了生の場合 —

### The Actual Circumstances and Movement of Japan Women's University Graduates — Part 3. The Case of Graduate School of Home Economics —

被服学科	佐々井 啓	住居学科	沖田富美子
Dept. of Clothing	Kei Sasai	Dept. of Housing and Architecture	Fumiko Okita
教育学科	真橋美智子	食物学科	塚原 典子
Dept. of Education	Michiko Mabashi	Dept. of Food and Nutrition	Noriko Tukahara

抄 録 本研究は、日本女子大学卒業生実態調査の一部として家政学研究科修了の1回生（1963年3月）から38回生（2000年3月）までを対象にアンケート調査を行ったものである。総数703名のうち、回答508名で回収率72.3%であった。

その内容は、①入学前の状況、②修了後の状況、③修了生の意識である。

その結果、家政学研究科修了生の特徴が明らかになった。入学の状況は、約71%が大学卒業後すぐに進学しているが、15.4%は修了時に40歳以上であった。職業については、専攻を生かした職についている者が多く、教育、研究の割合が高い。しかし、意識の面では、職業ばかりでなく、日常生活や社会的活動にも大学院で受けた教育の影響が顕著であることが明らかになった。

キーワード：大学院、意識調査、職業、社会的活動

Abstract This study is a part of "The Actual Study of Japan Women's University Graduates". We sent out questionnaires to the graduates of the Graduate School of Home Economics from March, 1963 to March, 2000. Of the 703 questionnaires distributed, 508 answers (72.3%) were collected.

We analyzed : 1) circumstances before entering graduate school ; 2) circumstances after graduation ; and 3) the consciousness of graduates. We can see many differences among these graduates. For example : 71% entered soon after graduating from university and 15.4% were over 40 years-old. Many of the graduates have professional jobs, especially in education and research. However, in their consciousness, it is clear that these graduates felt influenced by their education in graduate school, not only professionally, but also in their daily lives and social activities.

Keywords : graduate school, research of awareness, occupation, social activity

#### 1. はじめに

本調査は、日本女子大学卒業生実態調査（第1報、第2報）に引き続いて、大学院家政学研究科修了生についてなされたものである。

家政学研究科は、1961年に、児童学専攻、食物・栄養学専攻が設置され、次いで1978年に、住居学専攻、被服学専攻、1996年に生活経済専攻が開設され

て、家政学部5学科の上すべて大学院修士課程が設置されたのである。

また、1992年には、博士課程である人間生活学研究科が、人間発達学専攻、生活環境学専攻の2専攻として発足した。ここには家政学研究科から、専攻の枠を越えて進学できるようになっており、充実した研究・教育が行われるようになっている。

2. 調査の概要

1) 調査の目的および方法

以上のような状況をふまえて、家政学研究科修士の大学院進学への動機、修了後の進路、社会活動の動向、大学院在学中に受けた教育の評価などを中心に、大学院修了生の実態を明らかにしようと試みたものである。調査対象は、大学院修了1回生である1963年3月から2000年3月の38回生までの全修了生703名である。全員に対して2000年5月にアンケートを送付し、郵送で回収する調査を行い、そのうち508名から回答を得た。その内訳は、児童学専攻106名、食物・栄養学専攻256名、住居学専攻88名、被服学専攻45名、生活経済専攻13名であった。回収率は72.3%である。

本論では、大学院修了者の専攻別の意識を明らかにすることを目的として、専攻別に単純集計をして分析した。

2) 調査対象者の概要

調査の対象となった修了生は、大学卒業後すぐに進学した場合には、1回生は62歳、38回生は25歳である。したがってかなり年齢の幅が広いが、実際に修了時の年齢をみると、最も多いのが24~25歳で、全体の65.4%であり、26~29歳までは16.1%、30~39歳までが11.3%、40歳以上も4.1%を占めている。したがって、大学院の場合には、全体の三分之一は、大学卒業後すぐに進学した学生より年齢の高い学生が在籍していることになり、実際には62歳以上の修了生がいることになる。また、出身大学では、本学が69.0%を占めている。さらに、全体の70.2%が既婚者であり、子どもの数は、なし(19.3%)、1人(27.6%)、2人(39.1%)、3人以上(14.0%)である。

3. 大学院入学について

1) 入学前の状況

入学前の状況について、全体及び専攻別の内容を図1に示す。全体の71.3%が大学卒業後すぐに大学院に進学しているが、専攻別にみると、被服(以下、専攻を省略)が最も割合が高く(84.4%)、次いで食物・栄養(75.0%)であり、生活経済は最も低く(46.2%)となっている。生活経済は、開設されてから年数が浅く、いったん社会に出てから現職のまま大学院に進学した者が多いことがわかる。

また住居では就職後退職して進学した者が29.2%になっていることは、専攻の特徴を表しているといえる。食物・栄養でも19.5%であり、同様の傾向がみられる。

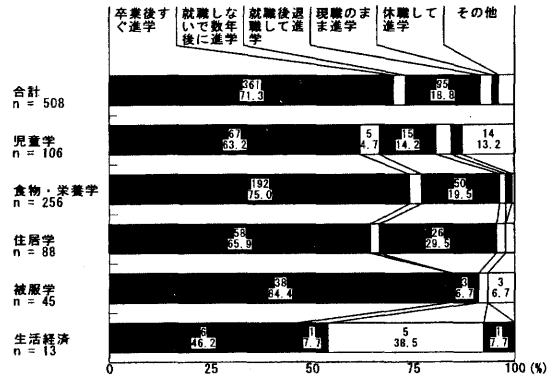


図1 入学前の状況

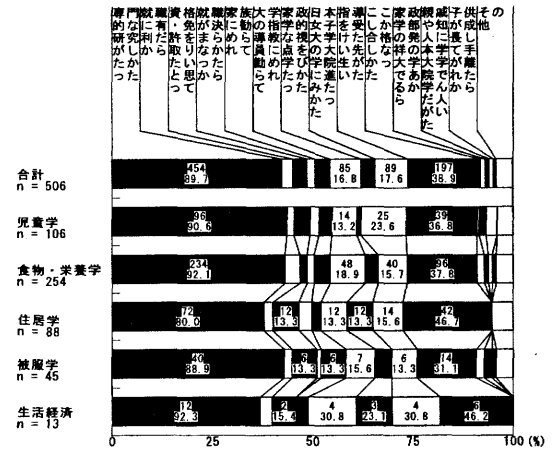


図2 進学動機

2) 進学動機 (複数回答)

進学動機については、図2に示すが、やはり「専門的研究がしたかった」が最も多くなっていて、506名中454名の回答を得ていて、全体の89.7%である。次に多い動機は、「指導を受けたい先生がいた」であり、197名の回答で、38.9%となっている。これは具体的に、専門的研究をするうえで指導を受けたい先生がいる、ということになり、大学院進学への動機としては当然であるといえるだろう。このような傾向は、専攻別にみても、ほぼ同じである。

しかし、「日本女子大学の大学院に進みたい」では、最も多い児童が23.6%であるが、最も少ない被服でも13.3%の回答があった。「大学の指導教員に勧められて」という回答も同じような割合を示しており、これらはどの専攻にも共通してみられる傾向である。「資格・免許を取りたい」、「家族に勧められて」、「家政学的な視点を学びたかった」という動機も全体としてそれぞれ約8%みられるが、専攻毎の違いはあるものの、同じような傾向を示している。

### 3) 学費 (複数回答)

学費については、図3に示す。508名中394名が「親族の援助」によっているが、これは77.9%にあたる。「日本育英会奨学金」の占める割合が全体で31.6%、多い児童では38.7%、少ない被服では22.2%となっている。「その他の奨学金」を合わせると、一番多い住居では59.1%になっている。また、「自己資金」の割合は全体で25.3%であるが、現職のまま進学した者が多い生活経済では、61.5%にもなっている。

全体として大学院に進学する場合には、「親族の援助」のみに頼るのではなく、奨学金や自己資金などを考えているといえる。すなわち、大学院の学生は、経済的な問題を深刻に受けとめているといえるのではないだろうか。

### 4. 大学院修了後について

#### 1) 修了後の状況 (図4)

修了後の状況では、全体の68.1%がすぐに就職している。その割合が一番高いのは被服 (84.4%) であるが、食物・栄養と住居では同じ割合 (71.1%) を示している。しかし、博士課程に進学した割合が一番高いのは住居である (17.8%)。実数は少ないが、生活経済でも博士課程への進学者は多くなっている。一方、児童では、すぐに就職した者は56.6%であり、就職しなかった者とその他の割合が多い。おそらく児童の修了者には、さまざまな進路があり得るのではないだろうか。

#### 2) 就職の内容

修了後すぐに就職した者と、入学前からの仕事を続けた者について、その業種・職種・勤務形態について尋ねた。

業種 (図5) では、全体として教育が最も多く (50.4%)、次いで調査・研究 (16.3%)、医療・福祉 (9.1%)、建設 (7.2%)、製造 (5.8%) である。専攻別では、教育の割合は被服が最も高く (73.7%)、児童 (53.0%)、食物・栄養 (56.4%) は全体の平均 (50.4%) に近い割合であるが、住居では18.8%である。

また、医療・福祉関係では、児童が最も多く (31.8%)、そのほかでは、食物・栄養の6.4%があるにすぎない。

住居で最も多いのは建設関係 (40.6%) であり、調査・研究 (21.9%) がそれに次いでいる。調査・研究は食物・栄養でも19.1%を占めており、かなりの割合であるといえるだろう。

また、製造は、食物・栄養 (8.5%) と被服

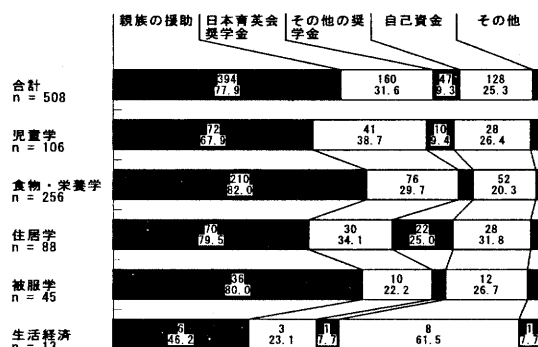


図3 学費・研究費

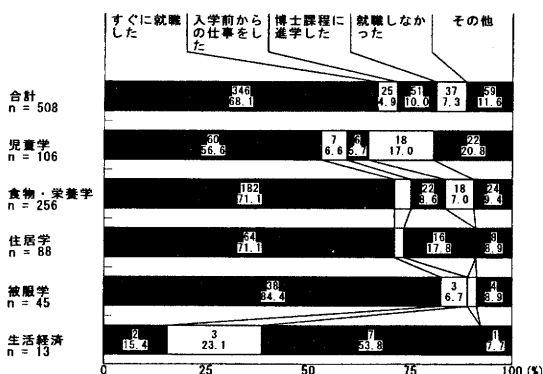


図4 修了後の就職状況

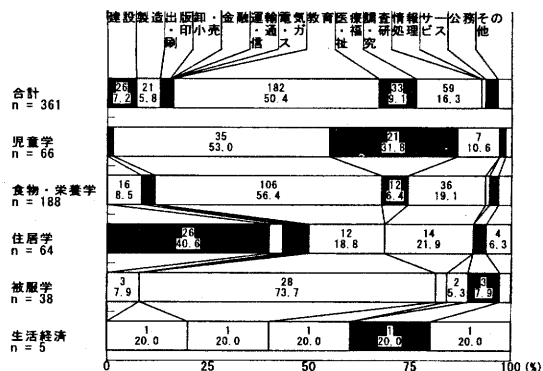


図5 業種

(7.9%) にみられるが、他の専攻にはほとんどない。この分野も、この2専攻の特徴であるといえよう。

職種 (図6) では、教員が最も多く、全体で40.5%を占めている。次いで、研究 (31.2%)、SE (5.2%)、設計 (4.9%) となっている。これを専攻別にみると、児童では、教員 (40.9%)、研究 (15.2%)、福祉指導 (6.1%)、事務・秘書 (4.5%) となっている。食物・栄養では教員 (45.3%)、研究 (41.1%) であり、この2職種で96.4%を占め、圧倒的に多くなっている。住居では、研究 (31.3%)、設計 (28.1%)、教員

(15.6%), 事務・秘書 (9.4%) である。被服では、教員 (60.0%), 研究 (12.5%), 事務・秘書 (10.0%) である。また、生活経済では、回答が5名と少ないので比較はできないが、研究、教員、販売の職についている。

いずれにしても、大学院修了者は、研究、教育をはじめとする専門的な職種に就く者が多く、その活躍が期待されているといえるのではないだろうか。

勤務形態 (図7) は、全体としてフルタイムの勤務が69.9%であるが、専攻によつての違いが大きい。たとえば児童ではフルタイム47.0%に対して非常勤・臨時勤務は39.4%であり、住居では93.9%がフルタイムである。また、食物・栄養では72.3%, 被服は55.0%である。次に、非常勤・臨時の勤務者は、前に挙げた児童の39.4%, 被服の32.5%, 食物・栄養の19.1%であり、この割合が多いのは、教育関係の業種が高い専攻と一致しており、おそらく、教育にかかわる非常勤や臨時勤務である場合が考えられる。

就職をした者に対して転職経験を尋ねたところ、全体では44.0%があると答えている (図8)。専攻別では、児童 (60.3%), 住居 (59.4%) が多く、食物・栄養 (37.1%), 被服 (28.9%) がそれについている。

現在就職していない者127名について、再就職の希望については、希望するものは73名 (57.5%) であった。専攻別では、児童19名 (希望なし7名), 食物・栄養26名 (40名), 住居16名 (4名), 被服9名 (2名), 生活経済3名 (1名) となっている。なお、希望業種は教育が多く、全体の60.9%を占め、それについて調査・研究18.8%, 医療・福祉7.8%の順であるが、実数としてはあまり多くないため、ここでは細かいデータは省略する。

### 3) 社会活動の経験

社会活動の経験では、全体では50.2%が「現在活動している」と答えている (図9)。「過去に活動した経験がある」(20.9%), 「今後活動してみたい」(12.8%) を合計すると、83.9%が社会活動に積極的である。現在活動している割合が高いのは児童 (66.0%) であり、低いのは住居 (40.0%), 生活経済 (38.5%) である。これは、フルタイムの勤務形態が児童では少なく (47.0%), 住居が多い (93.9%) という結果と逆の傾向を示しており、時間的にゆとりのある修了生は積極的に社会活動に参加していることがわかる。しかし、以上の結果をみると、フルタイムの勤務者でも社会活動に参加していることがわかるのである。

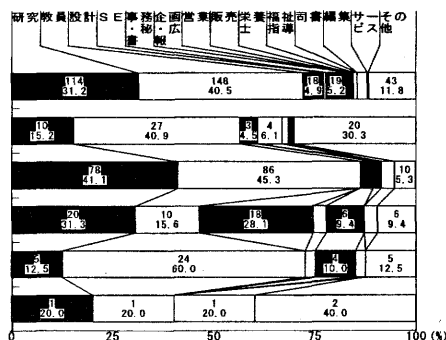


図6 職種

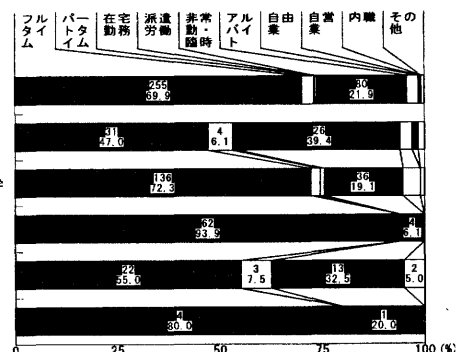


図7 勤務形態

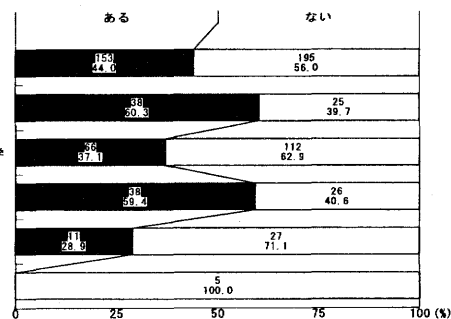


図8 転職経験

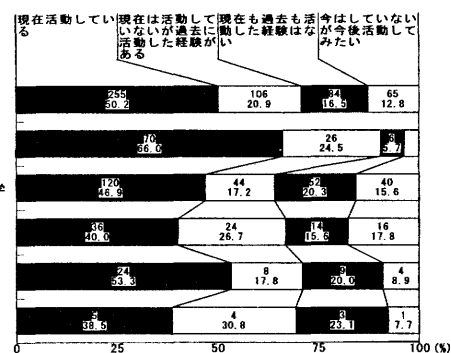


図9 社会活動の経験

次に、「社会活動を現在している」、「過去にしていた」361名の修了生に対して、その種類を尋ねた(図10)。複数回答であるので、全体で多い順に、地域団体(165名)、研究団体(158名)、職域団体(71名)、趣味サークル(68名)、同窓会(67名)、有志団体(66名)、学習サークル(53名)となっている。この傾向は各専攻においてもほぼ同じであるが、住居では研究団体が最も多く、被服では地域団体の次に研究団体、趣味サークル、同窓会がほぼ同じ割合で続いている。

この結果は、社会活動が職域団体、研究団体などの職業と関わりのある活動が多いことを示しているといえよう。しかし、地域団体での活動もかなりみられ、大学院修了生もまた、生活の場での社会的な関わりを深めていることが指摘できるであろう。

公職の経験については、「現在ついている」という回答が全体で13.0%であり、かなり少ない。専攻別では、住居17.5%、児童17.0%、食物・栄養11.8%となっている。これは、大学院修了生が職業についている割合が多く、社会活動においても職業との関わりのある活動が多いことから、公職の経験が比較的少ないといえるのではないだろうか。

参考までに公職の種類を挙げると、全体として、各種審議会委員(61.2%)、教育委員・社会教育委員(9.0%)、民生委員・児童委員(6.0%)となっている。

## 5. 大学院修了生の意識

### 1) 学んだ内容と生活との関わり

最後に、大学院で学んだことが生活に生かされているかどうか、という問いに対して、次のような結果が出た。

#### (1) 日常生活への影響

まず、日常生活については、全体で「生かされている」(76.4%)、「どちらともいえない」(19.7%)となっている。専攻別では、「生かされている」の割合が、食物・栄養(81.3%)、児童(79.8%)、生活経済(69.2%)、住居(68.9%)、被服(57.8%)である。日常生活に生かされている理由(複数回答・図11)では、最も多いものが「広い視野で考えることができる」であり、388名中215名が回答している。順に、「自分の価値観を形成できた」(192名)、「専門的な知識や技能が身についた」(146名)、「精神的な支えを得た」(132名)、「よい友人を得ることができた」(131名)、「よい教員と出会うことができた」(90名)となっている。

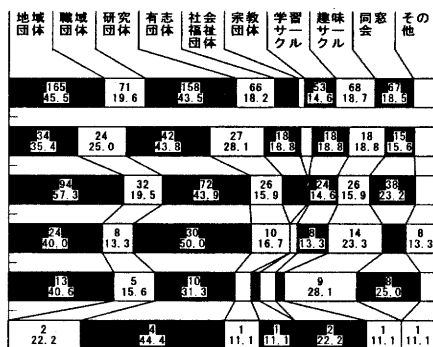


図10 社会活動の種類

日常生活に生かされている

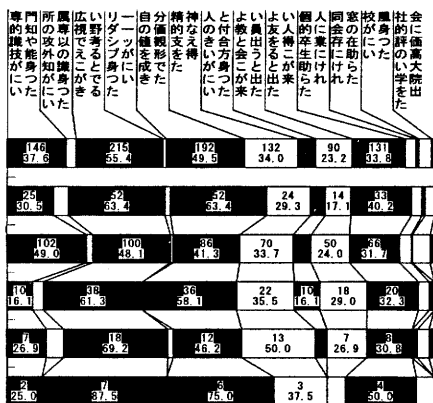


図11 日常生活に活かされている理由

専攻別では、児童では、「よい友人」が3位を占めているが、食物・栄養では、「専門的知識や技能」が2位となっている。また「精神的な支え」は、住居では3位、被服では2位となっている。生活経済ではどの項目も平均しているが、「よい友人」が3位となっている。

大学院の教育において、一般的には日常生活との関わりは指摘できにくいと思われるが、ここでは、「広い視野」、「価値観」、「精神的支え」などの抽象的な価値が日常生活に生かされているといえよう。さらに、「よい友人」や「よい教員」といった人間関係に恵まれたことが、日常生活を送るうえでも大きな意味を持っていることがわかるのである。

#### (2) 職業への影響

次に職業への影響については、全体で85.6%が「生かされている」と答え、「どちらともいえない」(8.4%)、「生かされていない」(6.0%)となっている。日常生活の場合よりも影響が大きいことは明らかである。また、専攻別にみると、食物・栄養(90.1%)、児童(85.4%)、生活経済(81.8%)、住



居 (79.1%), 被服 (75.6%) となっている。

職業に生かされている理由(複数回答・図12)は407名の回答を得ているが、全体として多い順に、「専門的知識や技能が身についた」(355名)、「よい教員と出会うことができた」(188名)、「広い視野で考えることができる」(163名)、「自分の価値観を形成できた」(94名)、「社会的に評価の高い大学院を出た」(65名)となっている。すなわち、専門的な職業についている修了生が多いと考えられるので、「専門的な知識や技能」が全体の87.2%を占めていることは、大学院での教育が直接的に役に立っている、ということになるのではないだろうか。また、「よい教員」は46.2%、「広い視野」は40.0%にあたり、専門的な知識ばかりでなく、「広い視野」を挙げる者が比較的多いことは、本大学院の特徴のひとつであると思われる。専攻別では、児童は「広い視野」が2位で「よい教員」と逆転しているが、ほぼ全体と同じ傾向である。食物・栄養では4位に「評価の高い大学院」となっているが、他は全体と同じである。住居では、順位は同じであるが「よい教員」の割合が高く(60.6%)、「広い視野」と「価値観」が同じ割合(39.4%)である。被服では、5位に「精神的な支え」(21.9%)があげられている。生活経済では、対象者が少ないのははっきりした傾向はつかめないが、「専門的知識」と「広い視野」の順であった。

(3) 社会的な活動への影響

社会的な活動への影響は、全体で57.6%が「生かされている」と答え、31.5%が「どちらともいえない」、10.9%が「生かされていない」と答えている。専攻別では、「生かされている」の多い順に、児童(73.5%)、生活経済(70.0%)、住居(67.4%)、食物・栄養(50.0%)、被服(38.1%)となっている。しかし、「どちらともいえない」が被服では42.9%、食物・栄養では39.0%であることから、「生かされていない」という否定的な意見は少ないといえよう。

社会的な活動に生かされている理由(複数回答・図13)では、261名の回答を得ているが、多い順に、「広い視野で考えることができた」(131名)、「専門的知識や技能が身についた」(115名)、「自分の価値観を形成できた」(105名)、「よい友人を得ることができた」(62名)、「よい教員と出会うことができた」(57名)、「精神的な支えを得た」(46名)、「人との付き合い方が身についた」(43名)となっている。

専攻別では、児童と住居で「自分の価値観」と「専門的知識」とが逆の順位になっているが、他の専攻で

職業に生かされている

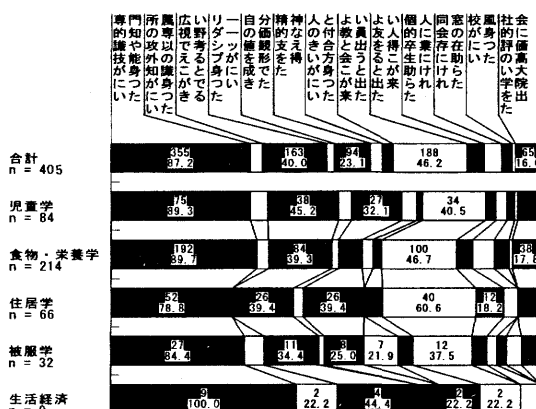


図12 職業に活かされている理由

社会的な生活に生かされている

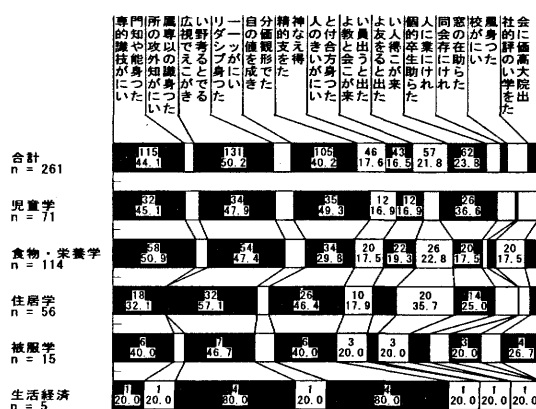


図13 社会的な活動に活かされている理由

は、全体とほぼ同じである。

社会的な活動への影響は、日常生活と職業への影響の両面がみられるのではないだろうか。すなわち、「広い視野」が第一であるが「専門的知識」、「価値観」も同様に重要であり、それらの割合はほぼ同じである。職業と結びついた社会活動では専門的知識が、地域の活動では広い視野が役に立っているといえよう。

2) 再教育について

最後に、再教育の希望について尋ねた(図14)。全体では、「すでに受けている」(22.6%)、「受けたいと切望している」(19.2%)、「受けてもよいと思っている」(38.2%)であり、こららを総合すると80.0%になる。専攻別でも住居の72.7%から、生活経済の100%まで、かなり多くの修了生が再教育についての意識を持っていることになる。

「受けたいと切望」、「受けてもよい」と答えた修了生288名に対して、その内容(2つ以内回答)を尋ね

た(図15)。

全体では129名が「大学または大学院で聴講」、次いで「留学または研修」(96名)、「博士課程に入学」(78名)、「講座」(53名)、「各種学校・専門学校」(31名)、「通信教育」(28名)などである。

専攻別でもほぼ同じであり、「すでに受けている」修了生を加えると、さまざまな再教育への意志を読み取ることができる。

また、日本女子大学に再教育制度ができた場合の希望(図16)は、すでに受けている修了生も加えて418名が回答しているが、全体で54.1%である。専攻別でもほぼ同じであるが、被服61.1%、児童57.0%、食物・栄養54.1%、住居42.9%となっている。また、生活経済では、8名中7名が希望している。

このように、再教育については、それぞれの修了生が、事情が許せばさまざまな形で受けたいと考えているようである。「留学または研修」と「博士課程に入学」では、かなり積極的に再教育を考えているといえよう。この場合には、現職のまま受けられるケースが増えれば、実現が可能な場合も出てくるであろう。また、「聴講」や「講座」、「通信教育」などは、再教育として受けやすいものであるといえる。特に職業を持っている修了生にとっては、時間的制約のなかで自らのキャリアアップをめざして考えているのではないだろうか。これからの大学や大学院にとって、再教育の要望をどのように受け入れるかというあらたな方向を暗示しているといえよう。

### 6. おわりに

家政学研究科の全修了生を対象としたこのような調査は、これまでなされていなかったもので、さまざまな内容が明らかになった。すなわち、大学院では、専攻毎の特徴が非常にはっきりと出てきたのである。そして、それぞれの専攻を生かした職業に就いている修了生が多いことも明らかになった。また、既婚者で子どものいる割合が多く、職業を持っていても社会的な活動も行い、さらに再教育についての意識も高い。

特に、「広い視野で考えることができる」、「自分の価値観を形成できた」とする修了生が多いことは、本学の建学の精神である全人的な教育の一端が浮かび上がってくるのではないだろうか。大学院であるからこそ、教員や友人との密接な結びつきがあり、そこでお互いに影響しあう、よい環境に恵まれていたと考えることができるだろう。

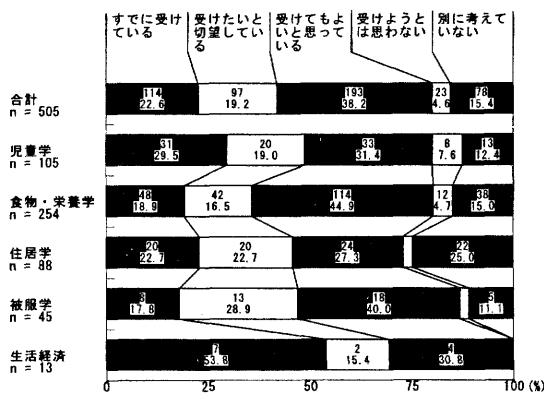


図14 再教育の希望

再教育を希望する人

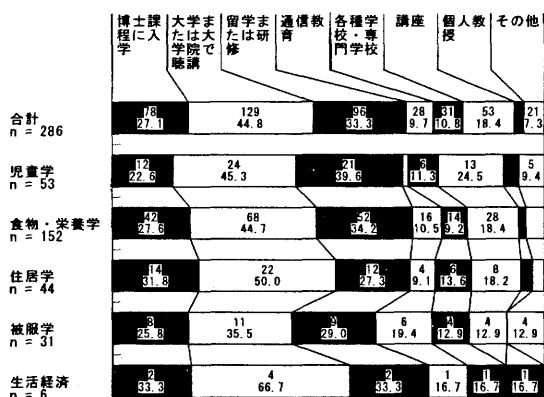


図15 受けたい再教育

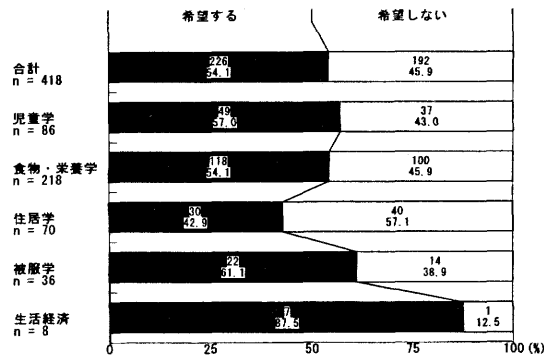


図16 日本女子大学の再教育制度の希望

最後に、この調査にみられるような修了生の意見を参考としながら、家政学研究科の将来についてさらに考えていく必要があるのではないだろうか。

付 記

本稿は、1999～2001年度の総合研究所研究課題「日本女子大学家政学部の100年—どのような卒業生を送り出したか—」の研究の一部である。

研究代表者：江澤 郁子

研 究 員：江澤 郁子，真橋美智子，沖田富美子，  
佐々井 啓，塚原 典子

客員研究員：一番ヶ瀬康子，館岡 孝，大野 静枝，  
小川 信子，宮崎 礼子，赤塚 朋子

---

本号掲載論文受理日 2001年9月28日  
(紀要委員 平田京子・馬岡清人)

---

日本女子大学紀要 第49号

---

2002年3月5日印刷

2002年3月10日発行

編集兼  
発行者

日本女子大学家政学部

発行者

東大教材出版

東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-3813-7389

FAX 03-3814-7989

---

発行者

日本女子大学

東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03-3943-3131

---

ISSN 0288-304X